

『掻き消される真実』 アンディジャンでの政府弾圧

そのころ当局は、アンディジャンに残っている者はいないか、キルギスタンやカザフスタンから戻ってきた者はいないか、捜していました。それで、（尋問の間）まだアンディジャンにいる人で、事件に関係している人を知っているかと、くりかえし訊かれました。米国から帰ってきた人たち（難民）は、直接迫害を受けていないですが、厳しく監視されているんです。でも、これは、今の間だけだと思います。政府は単に秘密を漏らさないために、全員ウズベキスタンに戻ってきてほしただけなんですから。

— “ウマール U.” 在キルギスタンのウズベキスタン難民

治安帰還の人が私にこう言ったんです。「やつら（帰還者）は、いつか報いを受けるだろう。いつか何かのミスを犯したら、すぐ刑務所へ送ってやる。公式にアンディジャンの罪でなくとも、何か別の罪でな。」

— “ロブシャン R.” ウズベキスタン難民

I. 要約

2005年5月13日、ウズベキスタン東部の都市アンディジャンで、武装した男たちによる襲撃があり、それに続き、政府軍が数百人にのぼる丸腰の抗議者を殺害してから、3年が経過した。今日もなおウズベキスタン政府は、アンディジャンの事件に関係がある或いは事件の情報を持つと政府がみなした人びとを、見つけだし迫害することに力を入れている。虐殺の直後にキルギスタンに逃れ、後に第三国に定住した、または一旦逃れた後にアンディジャンに帰還した数百人の人びとの、親族にあたる多くの人びとが、特に対象になっている。こうした人びとは、厳しい政府の抑圧下にある。人びとは、尋問され、常に監視され、村八分のように排斥されるなどの迫害にあっており、少なくとも一件は、あからさまに殺害の脅迫を受けている。そのために、虐殺から3年経ってなお、政府の迫害が、アンディジャンからさらなる難民を生んでいる。

ウズベキスタン政府は、アンディジャン難民の帰還を歓迎するとし、迫害などの報復を恐れる理由はないと、繰り返し述べてきた。しかし、アンディジャンは監視下にあり、インタビューに応じた人の安全を守った上で、独立した調査をすることは困難なので、帰還者たちの取扱いの実情を明らかにすることは難しい。2007年にヒューマン・ライツ・ウォッチが行った面接その他の調査によると、キルギスタンではアンディジャンからの難民が増加している。虐殺の後逃れてきて一度ウズベキスタンに戻り、再び逃げてきた人もいるし、抑圧が高まってきたために、最近になって逃げてきた人もいた。キルギスタンにいる難民たちの話から、アンディジャンで行われている現在の迫害の程度を知ることができる。

500人を有に越す人びとが5月13日にアンディジャンを逃れ、キルギスタンに逃れた。こうした人びとは、ウズベキスタンとキルギスタンの国境に設営されたキャンプに受け入れられた。キルギスタン領内の難民キャンプでは、帰還を強制される危険が極めて高かったため、2005年7月末に国際機関は難民たちをキルギスタンから待避させ、より安全なルーマニアへ移動させた。そこから、難民たちは徐々に、西欧、米国、オーストラリアなどに定住の地を得た。

2005年の虐殺に続く数ヶ月の間、ウズベキスタン政府は、5月13日のデモ参加者及び目撃者で虐殺後もアンディジャンに残る人びとに対して、系統的なハラ

メントと抑圧を展開した。これらの人びとは、逮捕され、拷問され、自白を強要され、デモの参加者の名前を挙げるように強要された。その中には、起訴され長期にわたる懲役刑を言い渡された人びともいる。また尋問された後釈放されるも、引き続き虐待され、起訴すると脅迫され、政府の情報提供者になるように絶えず迫られている人びともいる。2006年の間にこうした迫害は激化し、事件から2年以上経過しているにもかかわらず、人びとは逃亡せざるを得ないほど追いつめられている。

虐殺の直後から、政府はアンディジャン難民の親族をターゲットにして、難民たちを帰還させるように迫った。実際、多くの難民が、結局、第三国に定住する前に、キルギスタンから帰還した。当初帰還者たちは、政府から目立った虐待を受けることもなく、生活を再開できるかに見えた。ところが、2006年中頃から、政府は、特に帰還者を対象にして、新たに、大量の逮捕と虐待を始めたのである。ヒューマン・ライツ・ウォッチがインタビューした帰還者たちは、繰り返し尋問を受けたこと、また虚偽の自白を強要されたこと、5月13日に何が起きたのかについての政府見解を支持する供述調書に強制的に署名させられたことを語った。中には自白を公けにし、公開の場で自らの過ちを“認め”、許しを請うよう、強制された人びともいる。

米国に定住してから帰還した人びともいる。2006年後半から2008年初めにかけて、数十人が米国から帰還したが、複数の難民援助団体は、このようなことは前例がないと言っている。

難民たちが帰還を決意する理由は、すべて明らかなわけではない。虐殺の後、すぐさま逃亡し、残してきた子どもや両親がいるために戻る人もあるし、アンディジャン事件の後拘留されている男性親族のことを慮って戻る人もいる。外国での生活に適応することが、極めて困難に感じる人もいる。しかし、このレポートに記すインタビューでわかることは、帰還者の中には、アンディジャンの親族が受けている抑圧を止めたいがために戻った人びとが少なくないということだ。親族が拘留されている難民にこのケースが多い。政府が拘留期間を短縮すると約束したケースもある。残念なことに、アンディジャンに難民が帰還しても、虐待が止まることはなかった。

大多数のアンディジャン難民は帰還していない。アンディジャンに残る難民たちの家族は、多くの場合 2005 年 5 月 13 日の事件に何の関係もないのに、難民となった人たちがすでに外国に定住をしたと当局に明らかになった後も、当局による脅迫と虐待のターゲットになっている。アンディジャン難民の大多数が男性である。キルギスタンからルーマニアへの避難の際、439 人中 342 人が男性だった。彼らは妻子を残してきている。ヒューマン・ライツ・ウォッチがインタビューしたアンディジャン難民の妻たちは、当局の屈辱的な取り扱いとハラスメントの対象になっている。シングルマザーに通常与えられる福祉サービスを拒否され、マハツラ（隣組）という共同体から村八分にされている。さらにインタビューで明らかになったことには、子どもたちもいじめられ、学校当局から懲戒処分になると脅され、教育を中断されるケースさえあった。父親が国外逃亡した生徒を、“国家の敵の子”と教師が呼んでいるという報告もあった。男性の青年に対する虐待は特にひどく、尋問、拘留されたり、両親の行為を罪として起訴すると脅かされている。

アンディジャン難民たち本人も、ひとたびウズベキスタンから逃れてなお、大きな危険に曝されている。アンディジャンを逃れた人の多くがまずキルギスタンに行くが、そこではキルギスタン移民局に登録しなければならない。そして UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）に難民認定を申請する。ウズベキスタン難民が第三国に定住するまでには、たいてい 6 ヶ月から 8 ヶ月の間、キルギスタンで待機しなければならない。この期間が極めて危険である。なぜなら、キルギスタン政府は、難民条約(1951 年)及び同議定書(1967 年)の加盟国としての義務を負っているにもかかわらず、ウズベキスタン人庇護希望者たちを、多数ウズベキスタンに送還しているのである。ほかには、キルギスタンに展開するウズベキスタン警察の要員によって、誘拐されたと疑われる例もある。実際に、カザフスタン、ウクライナ、ロシアなど周辺の小国は、国際法に違反して、数十人の難民や庇護希望者をウズベキスタンに送還している。このような事態の中、この地域で暮らす多くのウズベキスタン難民は、身の危険を感じながら生活している。

* * *

ウズベキスタン政府は、アンディジャンの武装蜂起と大規模抗議行動の結成について、広範囲の捜査をした。しかし政府は、過去 3 年間、2005 年 5 月 13 日に起きた殺害のいずれについても責任を否定し続けてきた。政府軍が無差別に発

砲し、丸腰の市民を何百人も殺したことについては、夥しい数の証拠があるにも関わらず、である。さらに政府は、第三者による国際的な調査を拒絶し続け、事実を明らかにするのではなく、歴史を書き換えようとしている。そして、アンディジャンで何が起きたかという政府作成の見解に疑問を抱くすべての国民の口を、塞ごうとしてきた。政府は、自らアンディジャンで凄まじい弾圧を決行しながら、事件の真実を知るすべての者、特にデモの参加者と虐殺の目撃者を、抑圧してきた。アンディジャン事件について声を上げ、5月13日の殺害の責任を問うた、人権の守り手、独立系ジャーナリスト、政治家を拘留してきたのだ。2005年から2006年にかけて、非公開裁判で有罪判決を受けた数百人という人びとが、今も長期に収監されている。確かに、政府の建物を襲撃し、囚人を逃亡させ、政府職員を殺害し、人質をとった者たちは、深刻な犯罪を犯した。ウズベキスタン政府がこうした犯罪を捜査し訴追することは正当なことであり、法の支配を守るためには、そうすることが義務である。しかし同時に、丸腰の抗議者たちに向かって、行き過ぎた武力を用いた者についても、捜査し法的責任を問うことが、ウズベキスタン政府の義務である。

帰還者と難民の家族に対し、政府が虐待と強制を加えていることは、政府から独立した立場で発言する人びとをすべて抑圧しようという政府の政策という広い文脈の中で、理解されるべきである。

虐殺から3年経った今、アンディジャン事件をウズベキスタンの歴史の中で、完結した1章にしてしまわないことは、極めて重要である。EU各国、米国をはじめ、ウズベキスタンに関係する諸外国政府は、ウズベキスタンとの対話において、アンディジャン事件の陰が徐々に薄くなっていくのを押し戻すべきである。そうすることで、ウズベキスタン政府に、アンディジャンの虐殺の罪を明らかにしてこなかったことを指摘し、責任ある者を法で裁くことを再度要求することにつながる。もう一方で、このレポートにあるように、現在も続いている人権侵害が、本質的にアンディジャン事件の残渣に繋がっていることを明らかにすることにもなる。ウズベキスタン政府との関与の中で、EUと米国が、人権状況を現実に改善しようと努力をしているのは歓迎すべきである。そして、EUと米国の努力の中で、このレポートに記録されている迫害その他の人権侵害を止めさせることが、その主たる目的となることが肝要である。

II. 勧告/提言

ウズベキスタン政府への勧告/提言

- ウズベキスタンに帰還した難民の虐待をすべてやめること。
- アンディジャンの抗議行動に関与したと思われる人びと、または関与した者の情報を持っていると思われる人びとに対する虐待をすべてやめること。
- 難民の親族に帰還を説得するよう強要するのをやめ、要望があれば、そうした人びとが出国するのを許可すること。
- アンディジャンに戻ることを希望する人びとが、真の安全と尊厳を守られて帰還できるよう確保すること。
- 2005年のアンディジャン事件に関わったとされる人びと、難民になってから帰還した人びと、そして、難民となった人びとの親族など、アンディジャンのすべての人びとに、すべての社会福祉に対する平等のアクセスを確保すること。
- 独立の人権機関と報道機関が、妨害を受けることなく、アンディジャンを含むウズベキスタン国内各地で、活動することを許可すること。
- タシケントに本拠を置く外交使節団と NGO を含む第三者調査団に、保護を求めた国からウズベキスタンに強制送還された人びとへのアクセスを認めること。
- 不当に拘束・逮捕され拘留されている、人権の守り手、ジャーナリスト、政治家を即刻解放すること。

ウズベキスタンの関係各国への勧告/提言

- このレポートに記された虐待をとめるように、ウズベキスタン政府に圧力をかけること。そのために、ウズベキスタンを含む多国間人権対話の場及び2ヶ国間並びに多国間の高官レベルの会談のいずれをも活用すること。
- 独立した人権調査団、国際機関、報道機関が、自由にアンディジャンに入ることを許可するよう、ウズベキスタン政府に要求すること。

- アンディジャンの虐殺について包括的かつ独立した事実調査が必要であることを、ウズベキスタン政府との関与の中で、引き続き強調すること。
- 安全で尊厳ある帰還を確保する条件がアンディジャンに整うまで、ウズベキスタン庇護希望者たちの再定住を最優先課題にすること。庇護希望者たちにウズベキスタン政府がかける容疑は、実質を欠くこともあり、難民としての地位を与え、再定住を認めることの障害にしてはならないと、認識すること。

アンディジャンからの難民を受け入れている国々に対する勧告/提言

- 難民条約(1951年)及び同議定書(1967年)と拷問等禁止条約を遵守すること。具体的には、安全を求めて入国したウズベキスタン人を保護し、難民としての権利を保障すること。
- 難民、庇護希望者、その他いかなる個人も、迫害を受けるおそれがあるという十分に理由のある恐怖を有しているとき、または帰還した場合、拷問など劣悪な取扱いを受ける危険があると信じるに足る実質的な根拠がある場合、送還しないこと。